

世界ハビタット・デー2006 福岡 国際シンポジウム「魅力ある都市の実現に向けて」

日時： 2006年10月2日

場所： アクロス福岡4階国際会議場

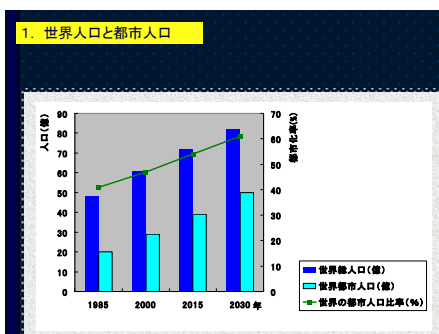
基調講演 「都市の磁力と役割」

演者 野田 順康 国連ハビタット・アジア太平洋事務所（福岡）所長

ただいまご紹介をいただきました国連ハビタットのアジア太平洋事務所長をしております野田でございます。本日は月曜日というお忙しい時期にもかかわらず、多数の方々にご出席をいただき大変うれしく思います。国連ハビタットも1997年に設立しまして9年でございます、地元福岡の方々を中心にして皆様から非常に大きな支援をいただいております。本当にありがとうございます。特に、国連ハビタット協力委員会、民間の企業の方々から多大なご支援を賜っているところでございます。本日は、この協力委員会会長の川合九州電力相談役や中心メンバーの西日本鉄道の長尾社長にもご出席をいただいているということでございます。心から感謝申し上げます。

この世界ハビタット・デーと申しますのは、国連が1986年に毎年10月第1月曜日を今後の都市問題をどのように考えていくか、都市政策、地域政策をどうするかを考えるための日として定めたものです。ただ、これまで取り上げてきているテーマや内容がなかなか硬いというのが現状でございます。例えば、これまで、都市間協力や昨年は持続可能性（サステナビリティ）ということなどを議論してまいりました。

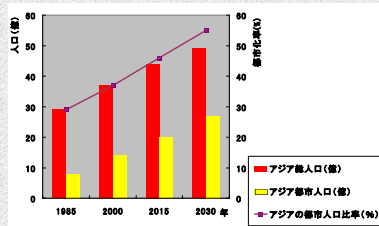
今年のテーマは、「都市の磁力」で、「マグネット・オブ・シティズ」といいますか、「マグネット・オブ・ホープ」といったことです。では、この都市の磁力とは何だろうか、ということですが、その辺をできるだけかみ砕いてお話を差し上げたいと思います。学界の方々から一般の市民の方々まで幅広くご参加をいただいているということでございますから、できるだけ分かりやすいお話をさせていただきたいと思うところでございます。



磁力としての都市というのは、やはり人間を集めるということです。パワーポイントに示しておりますのは、世界人口の動きです。2000年が62億人という数字です。この62億人という人口が、2030年に、これから24年のうちに83億人になります。今後二十数年のうちに2000年に比べて総人口が21億人増加するということになるわけです。環境問題からすると、私どもの母なる地球に非常に大きな負荷をかけるということです。

ではその21億人がこれからどこに住むかということです。下のほうの薄いブルーは世界の都市人口を示しています。世界の都市人口は2000年に29億人です。これが2030年に50億人と予測されていますから、この差も21億人です。したがって2000年から2030年に増加する21億人の人口は、すべて世界の都市に住まうであろうというのが、私ども国連の予測です。

2. アジア人口と都市人口



アジアでも同様な傾向が見られておりまして、2000年に37億人の人口であるものが2030年に49億人となり、約12億人伸びるわけです。都市人口は14億人から27億人ですから、13億人の伸びです。両者を比較しますと、都市人口の伸びが1億人分多い。要するに、この1億人は、地方から都市に集まってくるという形でアジアの都市化が急速に進んでいくという姿がここで示されています。したがって、これから中国大陆、またそれ以外のASEANの国々の大都市はどんどん大きくなっていくわけです。

さらに問題なのは、これらの増加する人口は発展途上国のスラムエリアに大半が住みついていくということですから、その辺の対策を十分にやらないと地域的には非常に不安定になる。大きな問題だと思っています。

3. メガシティ

	2000	2015
世界	19	23
アジア	11	14

(単位: 百万人)

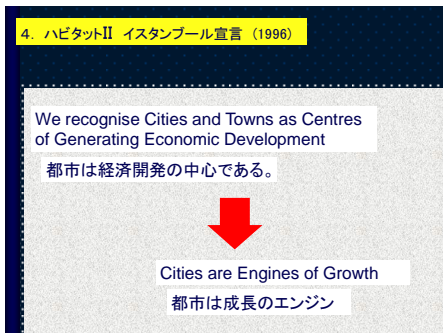
1950	人口	1975	人口	2000	人口	2015	人口
ニューヨーク	10.3	東京	19.8	東京	26.4	東京	28.4
		ニューヨーク	15.9	インドネシア	18.1	ジャカルタ	28.1
		上海	11.4	ジャカルタ	18.1	マニラ	23.2
		インドネシア	11.2	バンコク	17.8	バンコク	21.1
		バンコク	10.0	ニューヨーク	16.6	バンコク	20.4
				マニラ	13.4	シンガポール	19.2
				ロンドン	13.1	インドネシア	19.2
				シンガポール	12.9	ニューヨーク	17.4
				上海	12.9	ジャカルタ	17.3
				アムステルダム	12.6	シンガポール	17.3
						その他	

特に、三つめのパワーポイントに、メガシティといわれる、人口にして1000万人以上の都市の移り変わりを示しています。都市化というのはポスト工業化といって、工業をどんどんやっていたところからむしろ消費都市、いわゆる物を買ったりするお店の多い大都市に移っていくというのが都市化の現象とされています。

1950年ごろは、ニューヨークが唯一1000万人を超えた都市であったわけですがけれども、1975年には東京が1900万人となり、東京、ニューヨークという形になっていたものが、2000年にはニューヨークは下位に落ちていきます。そのところでメキシコ・シティやボンベイ（現、ムンバイ）といった、発展途上国の都市爆発がこのあたりから出てくるわけです。2015年のところもニューヨークはさらに人口の量からしますと下に落ちていき、上位には発展途上国の大都市が並んでいます。東京は2015年も引き続き都市圏としては世界最大の人口規模を持っているのではないかとされます。

しかし、日本の状況からしますと、日本はすでに総人口が減少に入っておりまして、東京の2025年の人口は大体2580万人とされています。ですから人口減少を起こします。したがっておそらく2025年には東京は第1位の座から落ちていくということですし、2050年には東京の首都圏の人口は大体2100万人というように推定をしております。恐らくトップ10には入らないというのが東京の姿です。そのときの東京圏の高齢者比率は38%になりますから、この辺についてはこれから検討すべき課題が日本の中に残されているのではないかと思います。

こういう都市化現象というのは、基本的には悪いものだというようにこれまで比較的受け止められてきたのだと思っています。何とかこの都市化を止めたい。都市化を止めるために、例えば、日本の場合も過疎法や地域振興立法を作って、いわゆる中山間地域といわれる所に公共投資を行って、人口移動を何とか止めようとした。実際どうだったかという、止まらなかったというのが現状です。今も引き続き都市化という状況は進んでいるわけです。



ここで示しておりますのは、「ハビタットIIイスタンブール宣言」です。私どもの国連ハビタットは1996年、まさに福岡事務所を作る前にトルコのイスタンブールで国際会議を開いて、もっと都市化というものを肯定的にとらえていったほうがいいのではないかと、ある程度都市化ということは良いことなのではないかというように捉えていったらどうかということをこのイスタンブール宣言の中で言ったわけです。

「都市は経済開発の中心である」、「都市は成長のエンジンである」という考え方を、1996年ぐらいに打ち出しています。結果的に、世界的な都市政策というのは、成長のエンジン論にこのときから移ってきたと考えています。例えば、フランスなどの国についても、今、盛んに言っているのは都市の国際競争力をいかにつけるかということです。いわゆる「成長のエンジン論」政策というものを取っております。今、国土交通省の大木参事官も、「日本も新しい国土計画を作っている」と言っておられました。この国土計画の中でも成長のエンジン論をどういう形で取り入れていくかということが非常に大きな課題になるわけです。

ただ、成長のエンジン論についてはなかなか理解が進まないというのが実態かと思えます。特に政治の世界においては、やはり地方振興ということにウェートを置いた話が多いものです。日本の場合にも今度の新しい計画において、地方振興と都市の成長のバランスというものを取っていくということが、どうしても課題として残るわけです。

5. 成長のエンジン論に対する抵抗

根強い「国土の均衡ある発展」論

アフガニスタンの都市化

	1995	2000	2005	2010
総人口 (千人)	20,669	23,735	29,863	35,642
都市人口 (千人)	4,081	5,050	6,839	8,838
都市人口比率 (%)	19.7	21.3	22.9	24.8
カブールの人口 (千人)		1,780 (1999)	3,000 (2004)	

ここに、アフガニスタンの都市化の状態を示しております。私は2002年ぐらいからアフガニスタンの戦後復興をやってまいりました。いちばん下にカブールというアフガニスタンの都市人口を示しております。1999年に178万人という数字ですが、2004年に300万人となりました。アフガニスタンではこれだけの都市集中を起こしているわけです。

私は 2002 年にアフガニスタンのパシュトゥン建設大臣に、「これからは都市が爆発するのだから、都市政策をうまくやらないと将来的に政治的不安定を起こすのではないか。」と申し上げました。しかし、やはりアフガニスタンも地方振興だということで、私どもは、今アフガニスタンに 800 人ぐらい人を張りつけて仕事をしていますが、地方振興の仕事のほうが都市整備よりも多いというのが現在の状況です。

このような状況の中で、ここには数字を示していませんが、2010 年のカブール、首都の人口は 500 万人と我々は推計しております。これから伸びる 200 万人をどのように、この 5 年間で対処したらいいのかというのが、私どもとしては非常に頭の痛い問題です。

いずれにしましても、今日のタイトルからしますと、やはり都市化の中で、都市が持っている雇用といわれるような経済力、水道や公共交通といったような社会力がまさに都市の磁力、ある意味では魅力ということになります。世界的な観点からいうと引き続き都市化、都市への人口集中を都市がどこまで受け皿となって引き受けていくことができるかということが、これからの地球社会における非常に大きな課題になってくるのであらうと思います。

6. 都市の役割 ⇒ 人口の受け皿

賢明な成長 (Smart growth) の原則

- インフラ設備のある地域に開発を限定
- オープンスペースの保存
- コンパクトな都市構造(建築設計)を促進
- 土地利用の純化から混合利用へ
- 住宅取得機会の拡充
- 徒歩生活圏の創造
- 地域の価値・魅力の尊重と助長
- 多様な輸送手段の提供
- 民間部門を活用した公平かつ費用効率の高い開発
- 地域の関係者間の協力による開発

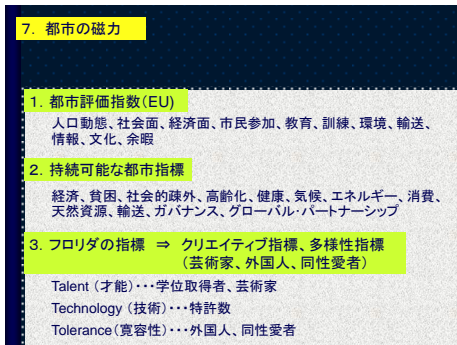
人口の受け皿としての都市人口ということですが、今申し上げたような都市への人口集中に対して、特に、発展途上国においてはいわゆる富の再分配、要するに政府が税金として吸い上げたものをきちんとそれぞれの所得の低い所に戻していくという再分配の機能が働かない部分があります。このため、結果的には格差を生むということになります。したがって、発展途上国の人口爆発は、都市部は伸びるけれども地方部は疲弊するという地域的な格差が生まれます。一方、都市の中でも富める者は富める、所得の低い者はさらに低くなる。こういう二つの格差を生むということは、結果的にそれが非常に大きくバランスを欠くし、ひいては政治的な不安定を生むことになります。そういうところをきちんと整備していかないと地域の安定、ひいては地域の繁栄というものを阻害するというのが、これからの世界の都市の状況です。

さらにそのところで、私どもの母なる地球ということを考えますと、そのように集中する都市が地球の自然環境に与える影響というのは非常に大きいものです。結局は環境問題、地球の温暖化というものと都市の人口爆発というものが関係をしていくということです。

したがって、私どもは昨年の世界ハビタット・デーでは「持続可能な都市」という話をしてまいりました。今日の世界の都市政策としては、ここに書いてございます「Smart Growth」、日本語では「賢明な成長」と訳していますが、成長管理という考え方を取り入れ始めています。一つ目にありますが、インフラ整備のある地域に開発を限定する。要するに「新しい地域の開発をやらない」、「更地に手をつけない」という基本的なことを考えていく必要があるのではないかとということです。すなわち、それは二つ目にありますオープンスペースをいかに保存していくかということと非常に密接な関係にあります。また三つ目にあるように、コンパクトな都市構造を作っていくことです。スプロールという都市の近郊に都市が伸びていくような構造よりは、ある程度都心部に集中した効率のいい都

市を作っていくということも非常に重要です。

それから、徒歩生活圏ということも非常に重要なことなのです。上から四つめぐらいに、土地利用の純化から混合利用へという難しい言葉を書いています。日本では用途利用と言っていますが「ここは工業地域です。」「ここは商業地域です。」「ここは住宅地域です。」と都市の中を区分して、土地の利用というものを決めた結果、結局は人の大きな移動を生むということになったわけです。それよりは、やはり徒歩生活圏、人が歩いて暮らせるようなエリアの中で、住宅、ショッピングセンターや職場もあるというような生活圏の考え方を導入したほうが、むしろ全体のエネルギーとしては少なくなくて済むのではないかと。「Smart growth」という考え方が、都市政策としては最近非常に大きなウェイトをもって考えられ始めてきました。



地球に優しい都市づくりや都市の磁力というものを考えるときに、やはり何らかの評価が必要だということで、盛んに指標開発がされています。都市評価指数というのはヨーロッパ（EU）で開発している評価指数ですが、人口や社会、経済面だけではなくて、例えば市民参加、やはり個々の人々が、住民自身が参加をしながら都市の成長なり、都市の環境というものを考えないとうまくいかないというような評価の形になっております。こういった評価指数も考えられておりますし、国連の持続可能な都市指標ということも考えられています。

また、フロリダの指標というのがありまして、特に先進国を中心にこれからの都市というのはどういう所が伸びて、どういう所が衰退するかということをいろいろ議論している人達があります。アメリカのフリードマンですとか、リチャード・フロリダという人が言っているわけなのです。特にリチャード・フロリダが、アメリカを中心として伸びている都市はどういう都市かということ、それはやはりクリエイティブな都市なのだ、創造性のある都市なのだと言っています。創造性があるということは、多様性があるという視点で都市を見ていく必要がある。多様性がありクリエイティブな都市というのは成長する。ここでは才能、技術、寛容性というような三つの軸で指標をはじき出して都市の評価ということをやっています。特に彼が強調している三つの指標の一つは、芸術家の数で、まさにこれはクリエイティブな指標です。

もう一つは外国人です。外国人の数が増えると多様性が増します。これは特にヨーロッパなどで国際化といいますと、それは自分の国の民族をできるだけ多様化して、いろいろな民族を入れることによってどんな国際状況にも対応できるようにするというのがヨーロッパでいろいろ議論されてきた国際化論なのです。私は、このところは日本と非常に違うと思うのです。日本はできるだけ純化をして、純化をすることによって効率性を上げるという考え方を取っていますが、本当の国際化というのは外国人をたくさん入れて、自分たちの外のいろいろな変化に対して十分にいろいろな形で多様に対応していける力をつけていくことを国際化というように呼んできたということです。

フロリダの指標の最後は、同性愛者の数なのです。日本人としては非常に違和感があるかもしれませんが、これをフロリダは、都市の寛容性を測るひとつの指標として同性愛者の数というようなもの

を挙げている。このフロリダの指標については世界的にはいろいろな議論があります。正しいという人もいれば、どうかなという人もいろいろいますけれども、こういう指標も参考にしながらこれから世界の都市というものを考えていく必要があるのではないかと考えているところです。

8. 日本の都市 …… 逆都市化

人口減少率	2025	2050
東京圏	△1.8%	△20.0%
名古屋圏	△2.3%	△17.2%
関西圏	△5.4%	△21.6%
中枢・中核都市	△4.2%	△19.1%
地方中小都市	△15.8%	△33.5%

世界全体の話はこれぐらいにしておきまして、少し日本の話をさせていただきたいと思います。日本の都市については逆都市化という現象がすでに起こっています。総人口が減り始めました。先ほど申し上げましたように、東京圏については2025年に2000年対比で1.8%の人口減。2050年には20%減るといことです。人口が10万人ぐらいの地方中小都市については、もっと激しい人口減少が起きます。2025年に15.8%、2050年には33.5%減るといことですから、2050年ぐらいまでに今の地方都市の大きさといのは3分の2ぐらいまでに減少してしまうという状況が出てきているわけです。こういう中で日本の都市といのものをどのように考えていったらいいか。戦後の高度成長のときに非常に荒々しい都市を作っていますが、これから都市が縮小していく中で、いかに整序するかが大切です。最近の総理演説の中での「美しい国づくり」といのもこの辺から来ているのかもしれない。そういう「美しい都市」にどのように変身をさせていくかといのが、日本の都市政策としては重要な問題点になろうかと思ひます。

ただし、福岡市の場合にはちょっと違ひます。厚生労働省人口問題研究所の推計では2025年まで福岡市の人口は減りません。さらにその先について推計をしていないのですが、2025年で150万人を突破するといのが人口研の推計です。中心部の高度利用の具合によつては、かなりの人口増加が続くといことを考えたほうがいいのではないかと、私などは考えています。

9. 高次機能の配置状況

産業関連機能の地域分布をみると、外国人や情報関連サービス等の高次機能が東京圏に集中している。

項目	三次都市圏	東京圏	関西圏	名古屋圏	地方圏
人口(2004年)	50.0	26.8	14.5	8.7	50.0
国内銀行貸付残高(2004年末)	70.2	49.9	15.4	5.8	29.8
外国法人数(2004年)	93.4	89.4	9.7	2.3	8.8
情報サービス、広告業従業者数(2004年)	77.7	69.3	12.9	6.4	22.3
対事業所サービス従業者数(2004年)	58.1	35.5	14.0	8.7	41.9
資本金10億円以上の本数(2004年)	79.2	58.0	14.9	6.3	29.8
学術・開発研究機関従業者数(2004年)	69.1	53.3	11.5	4.3	30.9

(注) 1. 東京圏(「東京人口」、日本銀行「金融経済統計月報」、国土庁「国勢統計年報」、総務省「国勢調査-企業統計調査」) 2. 地方圏(三次都市圏以外) 3. 三次都市圏(高松圏、徳島圏、香川圏) 4. 地方圏(二次都市圏以外の地域) 5. 東京圏(埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県) 6. 関西圏(兵庫県、大阪府、兵庫県、奈良県) 7. 名古屋圏(岐阜県、愛知県、三重県)

続いて、日本の都市の動向です。国全体の国土構造といことを少し考えてみますと、これはやはり一極集中なのです。日本の戦後の高度成長、明治以降と言つてもいいかもしれません。皆さん「脱亜入欧」とい言葉をご存じかと思ひます。福沢諭吉が「ヨーロッパは文明、アジアは野蛮、われ東方の悪友を謝絶する」といようなことを言っています。要するに日本の国が成長するには欧米と付き合うのだ。欧米と付き合うためには人、物、金、情報を東京に集めて、東京から欧米との交流、交易をやつてきたといのが戦後の状況であるわけです。特に高次都市機能、例えば、外国の法人数ですとか、本社機能、情報、学術研究といのものについては、大体首都圏が50%を超えています。この傾

向は今もさらに進んでいます。東京の一極集中が進んでいる状況にあるわけです。この辺がどう変わっていくかというのを、特に日本の国土計画をやっている方々は考えているわけです。

私もその辺は東アジア経済の発展の中でこういう構造はかなり変わってきたと思っています。例えば、日本の輸出入の状況を見ますと、1980年ごろには欧米との関係が5割以上でした。それがここに来て3割ぐらいまで落ちてきています。アジアとの関係でいきますと3割ぐらいのところ、すでに50%に近いという形で日本とアジアとの関係が非常に深まってきているという状況です。



それはすなわち、日本の都市ですとか、港湾、空港という所に大きな影響を与えています。10番目のパワーポイントは、特に輸出用のコンテナの取り扱いの地域的な分布を示しています。今コンテナの輸出の量というのは全国平均で4.6%増です。これを日本海沿岸の諸港という形で推計をしますと、13.4%増です。日本海沿岸の特に、金沢や下関や新潟などの伸び率が高いということです。もちろん絶対量については太平洋側が強いのです。太平洋側が80%を超えると思いますが、伸び率からすると日本海側へのシフトが見られるということであり、やはり、国土構造的にいうとこれは非常に大きな変化を示しているのではないかと、私は思っているところです。



こういう東アジア経済圏と日本との関係を考えていくときに、東アジアの経済圏というのはどれぐらいのスケールでものを考えたらいいでしょうか。EUについて考えてみますと、EUは非常に緊密な経済圏を作っております。直径は2000キロです。2000キロを超え始めるとあまり緊密な経済圏というのはできません。例えば、北米、アメリカにNAFTAという経済圏があり、直径が8000キロです。この規模になると、大体西海岸に偏る、東海岸に偏るという偏りが出てくるわけです。東アジア経済圏を考えると、本当に緊密な経済ということであれば、やはり直径2000キロぐらいのところを考えたほうがいいのではないかと思います。



東京圏については、引き続き関東圏という 3500 万人の人口規模を持っていますから、かなり大きな経済力で、また、所得も高いです。しかし、東アジアの経済圏はどの辺を中心にして考えるかという、東京ではないだろうというのが世界の常識だと私は思っています。今、東京を中心に東アジアの経済圏を語る人は少ないです。むしろ、ここではたまたま上海を中心に 2000 キロの円を書いていますけれども、どうも大陸の沿岸あたりが中心、重心というものがあるのではないかと思います。こういったことを考えあわせると、東アジア経済圏の中でやはり九州の都市の優位性というのが非常に高いものがあるのだと私は考えるわけです。



例えば、これなどは韓国の政策として今盛んに議論している BESETO 構想です。これは Beijing (北京)、Seoul、Tokyo という意味です。ここに北東アジアの開発軸というものができてくるのではないかと韓国などが今盛んには言っているわけです。この軸上にある都市が、経済的にはさらに伸びてくる可能性があるのではないかと今盛んに言われています。



これは国連のアジア太平洋経済社会委員会が、今、指定をしているアジアハイウェイ、アジアの中の高速道路の地図です。北東アジアを見ていただくと、日本については東京から福岡までが指定されています。プサン（釜山）と福岡の間をどうするかはいろいろな考え方がありますが、船で行く、フェリーで行く、橋を架ける、トンネルを通る、いろいろな方法があると思いますが、そこから朝鮮半島に上がって大陸に走っていきます。これが先ほどの BESETO 構想の交通網です。

私は今年の 9 月 15 日に「半島開発会議」という会議に出てきました。これは北朝鮮も対象にしてお

ります。報告の中にロシア、中国、北朝鮮が鉄道の路線に合意をしたという、非常にホットなニュースもありました。恐らく5年程度で半島を貫く鉄道網が整備されるのではないかと思います。先ほど申し上げたB E S E T O構想というものが、非常に現実味を帯びてくるのではないかと思います。



このようなことを申し上げていくと、やはりこの日本列島の開発の中で九州北部の都市、九州の都市というものが、非常にポテンシャルを伸ばしていく可能性があります。そして福岡については物流の拠点として伸びていく可能性が非常に高いのではないかと思います。ここでは空港・港湾について書いています。空港は、やがて新たな航空事業を発生させるでしょう。特に今、アメリカではリージョナル・ジェットという小型機を飛ばしています。これは乗客席100名ぐらいの飛行機です。それを飛ばしていくということですから、いわゆる北米と日本が付き合っていた、交流をしていた、交易をしていたときの大型機による長距離で大量に輸送するシステムから、東アジアと付き合いときには小型機による少量輸送の頻度をどんどん上げていくというタイプの交通ネットワークに変わっていくのではないかと思います。

このようなことを考えていきますと、先ほど少し日本海側の港の可能性、これらの都市の発展の可能性についても触れてきました。地方空港についても少量輸送、頻度が高いというようなことであれば東アジア経済圏の中では、地方空港の利用の可能性も非常に出てくるということです。そういう意味では、必ずしも日本の三大都市圏ではないエリアの地方都市の発展可能性もあるのではないかと思います。

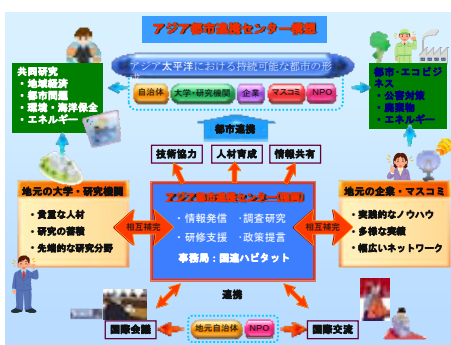
このところは国土計画という観点からしますと、あまり九州の話ばかりもできませんので、いろいろな所に想定される点線で航路など書いていますが、やはり博多、福岡の重要性というのはこういうことからしてもかなり高いのではないかと思います。



最後に福岡の話ですが、皆さんご存じのように今年6月の「Newsweek」という雑誌で福岡が「世界でもっともホットな10都市」の一つに選ばれたということです。ラスベガス、ミュンヘン、ロンドンと同様に福岡が選ばれたということで、これはかなり新聞記事になりました。ただ私が注目していたのはもっと前でありまして、実は、昨年6月にウォールストリートジャーナルのバロンという雑誌が

ありますが、そこが世界の投資家にアンケートを取って、世界でもっとも住みやすい都市というのを七つ選んでいます。その七つのうちの一つが福岡であったということです。例えば、アメリカのジュピターやソルトレイクシティ、カナダのバンクーバーも素晴らしい都市です。モナコのモンテカルロもなかなかいい都市です。こういう都市と並んで福岡という都市が選ばれています。

私は福岡にまいりまして、福岡の人といろいろお話をします。「オリンピックなんか来てほしくない」と言う人もいれば「もう成長なんか嫌だ」と言う方もたくさんおられるわけですが、都市には盛衰があり、運命というのがやはりあるのです。福岡が伸びるとするのは運命ですから、そのところをあまり否定してもしかたがないのではないかと思うわけです。都市化を否定された人々もこれまでたくさんおられるわけですが、都市化を止めるのはなかなか至難の技です。やはり、皆さん福岡の良さをわかってこられる方が非常に多いわけです。今の福岡の良さを失わないようにしながら、どういう形で成長管理していくかということが非常に重要なポイントになってくるのではないかと思います。



私も国連ハビタットではアジア都市連携センター構想をすでに始めています。先ほど申し上げたようにアジア太平洋の66都市で、開発と自然環境の保全というもののバランスを取った都市開発を盛んに進めているところです。そのために、今、アジア太平洋地域で、大体60ぐらいの機関とネットワークを組んでやっています。やはりこういうところときちんとした情報交換をすることによって、みんなが優良事例のノウハウをわかちあっています。スラム問題、都市爆発、人口爆発、都市の成長などというものに対して、地域みんなで取り組んでいく。それが結果的にアジアの安定、さらには繁栄というものに結びついていくというように考えておりますので、私どもとしてはぜひこういうことをやりながら、アジア太平洋地域の安定と成長に今後とも寄与してまいりたいと思っております。

今申し上げたようなお話を基に、このあとパネルディスカッションをしていただきます。さらに都市の磁力とは何か、都市の魅力とは何か、都市の役割は何かということをおのこのあとのパネルディスカッションで深めてまいりたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。ご清聴どうもありがとうございました。